

## 2021 年度大学入学共通テスト 解説〈倫理〉

### 第1問 源流思想

問1  正解は①。

- ① ペテロはイエスの第一の弟子とされる人物で、初代のローマ教皇と位置づけられている。十字架刑に処せられたイエスが三日後に復活したことから生前の行いを悔い改め、使徒としての使命を自覚した。
- ② 荀子は人間の本性は悪であるとして、悪なる本性を矯正するために人為的に礼を身につけるべきだと説いた。欲望が自然に落ち着くわけではない。
- ③ 董仲舒は儒学者の一人で、天と人とが密接に関係するという天人相関の理論を説いた。それによれば、自然災害は善政ではなく悪政が行われている社会において起こるとされる。
- ④ スンナ派ではなくシーア派についての記述。ムハンマド亡き後のイスラーム共同体(ウンマ)の指導者カリフの座をめぐることは、ムハンマドのいところに当たる4代目アリーが暗殺されてから分裂が起こり、アリーの子孫にのみ正統性を認めるシーア派が形成された。多数派のスンナ派と対比される。

問2  正解は②。

- a 「福音」が入る。福音とはもともと「喜ばしい知らせ」という意味で、イエスによって伝えられた新しい救済の教えを指す。
- b 「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも」が入る。イエス以前のユダヤ人の世界ではユダヤ人のみが救済の資格を持つとされてきたが、イエスは民族の差異を認めず、万人に救済の道が開かれていると説いた。使徒パウロはこの教えを踏襲している。
- c 「律法」が入る。ユダヤ教では神の掟としての律法を遵守することによってのみ救われると説かれてきたが、パウロは、人間の根源的な罪深さを強調し、正しい行いではなく、ひたすら悔い改め信仰することによってのみ救済が可能だと説いた。

問3  正解は①。

- ① エピクロスは、心のうちにある欲望をすべて克服した煩いのない境地(アタラクシア)こそが幸福であると考えた。
- ② エピクロスがとった快樂主義の立場とは、刹那的な物質的な快樂などではなく、永続する精神的な安らぎのことを指す。

- ③ ストア派は自然の理法と人間の理性が一致するとして、「自然に従って生きる」べきことを説いた。
- ④ エピクロス派やストア派と同時代に活躍したヘレニズムの思想家の一人であるピュロンについての記述。

問4  正解は③。

- a 「十分に準備をした上で発表に臨めていなかったのだから」が入る。大問の冒頭会話文中でXは「準備を怠けていたことに気付いて、恥ずかしくなる」「もっと頑張るべきだった」と述べており、また「周りの評判は関係なくて」とも述べている。
- b 「慚」が入る。資料には「自分自身によって引き起こされ」るものが「慚」だということなので、Xの恥ずかしさはこれに該当する。

問5  正解は③。

- ③ 不殺生(アヒンサー)は仏教やバラモン教、そしてヒンドゥー教でも大切にされているインド思想の根本理念の一つだが、ジャイナ教は中でもこれを徹底する。
- ① 十戒などの律法は「イスラエルの民が自ら定めた」ものではなく、イスラエルの民に対して神が与えたものとされている。
- ② 「王道」と「霸道」の説明が逆になっている。
- ④ 「全体的正義」と「部分的正義」の説明が逆になっている。

問6  正解は①。

- ① 資料には「聖人や知恵が首かせ足かせを留める楔となっている」とあり、孔子が理想とした周公旦などの聖人の教えが刑罰によって苦しめられる者を生み出している、というのが荘子の主張である。
- ② 資料には「仁や義が手かせ足かせを固める錠前となっている」とあるので、荘子は「人々が仁や義を欠くことで罪人となっていると嘆いている」のではなく、むしろ「仁や義」が罪人を生み出していると考えている。
- ③ たしかに資料文で荘子は儒家と墨家をまとめて批判しているが、前半部分にある、墨家が「儒家と同様に仁と礼の思想を重んじた」というのが事実と反している。墨家は儒家的な仁は差別的な愛であると批判し、儒家の重んじる礼も形式主義的なものとして批判した。
- ④ 前述の通り、荘子は仁や義を批判しており、その点で老子と同じ立場である。

問7  正解は④。

- a 「利子」が入る。イスラームで利子が禁止されているというのはやや細かい知識事項だが、文脈から推測することもできるし、ムスリムの義務としての五行の一つに「喜捨」があることを想起すれば、「寄付」が禁じられているはずはないと判断できる。
- b 「クルアーン(コーラン)やスンナなどに基づく」が入る。「スンナ」とはムハンマドの言行のことで、クルアーンやスンナなどを基に体系化されたイスラーム法のことを「シャリーア」という。

問8  正解は①。

- ① ソクラテスは知恵と真実と魂を配慮すべきであるとして、評判や名誉ばかりを気遣うことを恥すべきだと批判している。キケロは友の命や評判を重視する立場から、よほど恥すべきことでない限り、「道を外れてでも手を貸して然るべき」と主張している。
- ② 後半が正しくない。キケロは、「あまりに恥すべきことが結果しない限り」で友を助けるべきだとしているので、「恥につながる」手助けをすべて否定しているわけではない。
- ③ 前半が正しくない。ソクラテスは、評判や名誉よりも魂が優れたものになるよう配慮することを重視すべきだと説いている。
- ④ ②③より、前半も後半も誤っている。

## 第2問 日本思想

問1  正解は③。

- ③ 日本の記紀神話には、キリスト教などに見られるような唯一神・創造神は登場しない。ギリシア神話もこれと同様であって、資料には、ガイアからポントスやオケアノスなどの神々が生まれたとある。
- ①② 前述の通り、記紀神話には唯一神・創造神は登場しない。
- ②④ 資料文によれば、オケアノスはガイアとウラノスの間に生まれているが、ポントスはガイアがウラノスと結ばれる前に「情愛なくして生んだ」ということなので、ウラノスが生んだわけではない。

問2 10 正解は①。

- a 「右下の屋敷内の人物を極楽往生に導く」が入る。絵画資料からも明らかだが、生徒の調べた結果に、「この仏は阿弥陀仏だ」とあるので、来世で極楽浄土へと生まれ変わること(=往生)を目指す浄土信仰についての資料であることがわかる。浄土信仰は③④のような「現世利益」を否定する。
- b 「仏の教えだけが残っており、正しい修行も悟りもない」が入る。浄土信仰が前提とする末法思想によれば、釈迦入滅後の500年間(または1000年間)は仏の教え(教)・正しい修行(行)・悟り(証)のすべてが生きている正法の世だが、その後1000年間(または500年間)は教と行のみが生きる像法の世であり、さらにその後1万年間は教のみが生きる末法の世が続くとされる。②④のbは像法の説明となっている。

問3 11 正解は②。

- a—ア ひたすら坐禅に打ち込むことを只管打坐といい、それによって一切の執着から解き放たれることを身心脱落という。
- b—オ 坐禅によって悟りの境地に至ることができるのであるが、坐禅は悟りのための手段ではなく、坐禅という修行のうちにのみ悟りがあり、修行がすなわち悟りであるという考え方を、修証一等という。
- イ 南都六宗は奈良時代に形成された宗派。
- ウ 浄土信仰の立場。
- エ 真言宗を開いた空海の立場。

問4 12 正解は②。

- a 「林羅山」が入る。師・藤原惺窩の推挙に基づき、將軍家の侍講として仕えて朱子学を漢学化させたのが林羅山である。荻生徂徠は朱子学を批判した古学派に位置づけられる。
- b 「人間社会にも天地自然の秩序になぞらえられる身分秩序が存在し、それは法度や礼儀という形で具体化されている」が入る。幕府が確立を目指していた身分秩序を理論的に正当化した「上下定分の理」についての説明である。①③のbは荻生徂徠の古文辞学についての説明となっている。

問5 13 正解は③。

- ア 誤り。石田梅岩は町人の営利追求を賤しいものとみなされていた当時であって、それが武士や農民たちの営みと同様に職分を果たすことで天下の助けになるものであるとして、町人の立場を擁護した。

イ 正しい。井原西鶴はこの世を「憂き世」と捉えがちであった伝統に対し、これを「浮き世」として捉え、町人たちの享樂的な生を生き活きと描写した。

問6 14 正解は⑤。

ア 戦後を代表する政治学者の丸山真男。敗戦直後に書いた「超国家主義の論理と心理」で、結果責任を負おうとしない指導者たちを糾弾し、日本を覆う「無責任の体系」を批判した。

イ 戦前戦後を代表する文芸批評家の小林秀雄。昭和初期の評論「様々なる意匠」で、当時の文壇で流行していたマルクス主義や写実主義など様々な「意匠」を、批判的に論評した。

ウ 吉本隆明。著書『共同幻想論』の中で、国家が人々の共同幻想によって成立しているに過ぎないと指摘し、柳田国男の『遠野物語』などを手がかりに、地に足のついた実生活に根ざした思想の構築を試みた。

問7 15 正解は④。

④ 南方熊楠は、明治政府が神社の統制を行うために発した神社合祀令に対して、鎮守の森の破壊が生態系の破壊につながるとして断固とした反対運動を展開した。

- ① 中江兆民についての説明。
- ② 柳田国男についての説明。
- ③ 田中正造についての説明。

問8 16 正解は④。

④ 資料文 5-6 行目「誰かが作ったという感じを失ってしまって、まるで天地と共に既に在ったような感じがする」などを言い換えた記述といえる。

- ① 資料文 5 行目から、末尾の「作者の存在を強く意識させる」が誤り。
- ② 資料文 2 行目「永遠性を持つ」、3-4 行目「今後無限に存在するとしか思えない」から、末尾の「その作品もいずれは消滅することを予感させる」が誤り。
- ③ 資料文 7 行目「いつの間にか人心の内部にしみ渡る」から、末尾の「人々の心の中に浸透していくこともない」が誤り。

## 第3問 西洋近現代思想

問1 17 正解は①。

- ① 資料文 4-7 行目に、ルターは「政治的にも、経済的にも……現実に向き合おうと決意……した人々」によりどこを与えたとあるので、ルターの思想が「個々人の良心を政治や経済の諸問題から切り離す」ものだという記述は誤り。
- ② 資料文 5-6 行目で、「自ら現実に向き合おうと決意し、その決意に自分のアイデンティティを見いだそうとした人々にとって、新たなよりどころとなった」とある。
- ③ 資料文末尾で、ルターの思想が「一部の人々のではなく、万人の尊厳と自由のための基盤となった」とある。
- ④ 資料文 7-8 行目で、ルターの思想は「平等、民主主義、自己決定といった一連の概念へ通じる道を開」いたとある。

問2 18 正解は③。

- ③ デカルトによれば、精神は身体から独立しているが、身体に由来する情念によって強く影響を受ける。これを統御するのが高邁の精神である。
- ① モンテーニュのモットーである「ク・セ・ジュ(私は何を知っているのだろうか)」を念頭に置いた誤文。
- ② モンテーニュやパスカルらのモラリストについての記述であり、デカルトはモラリストの系譜には位置づけられない。
- ④ 学問を確実な土台の上に基礎づけることを目指したデカルトの議論についての記述だが、高邁の精神は科学的・学問的な認識に関わるものではなく、実践に関わるものである。

問3 19 正解は④。

- ④ 資料文には、「社会的通念」という敵に出会うと、良心は「押し黙る」ことを余儀なくされ、「何も語らなくなり、応答しなくなる」とある。
- ① 「良心を感じるやましさが「いっそう強くなっていく」というのは、資料文の主張と逆である。
- ② 「世間の常識」が資料文にある「社会的通念」に当たるものなので、これが良心を押し黙らせるという資料文の趣旨から判断すれば、良心に反する命令に従う人は誰もいないという記述は不適當である。
- ③ 「良心を生み出した世の中のモラル」とあるが、資料文では「良心は社会的通念の産物である」という考え方が正面から否定されている。

問4 20 正解は⑤。

- ア 実存の第二段階に当たる「倫理的実存」の説明である。
- イ 実存の第二段階で生じた絶望を経て到達する第三段階の「宗教的実存」の説明である。
- ウ 実存の第一段階に当たる「美的実存」の説明である。この段階の絶望を経て、人は倫理的実存に向かっていくとされる。

問5 21 正解は⑥。

- a 「オーウェン」が入る。文脈上、aには社会主義的な構想を抱いたにもかかわらず、マルクスらによって批判された人物を入れなければならない。エンゲルスはマルクスの盟友で、『空想から科学への社会主義の発展』においてフーリエらを批判した張本人なので、オーウェンが適切である。
- b 「空想的社会主義」が入る。前述の著作でエンゲルスは、剰余価値学説や史的唯物論によってマルクスの理論が「科学的社会主義」の地位を獲得したのに対し、オーウェンやフーリエらの主張は、資本主義の仕組みを解明することなくそれを道徳的に非難し、新たな社会をつくる担い手を指摘することなく理想世界を思い描いただけであるとして、そうした立場を「空想的社会主義」と呼んだ。「社会民主主義」は、一般に議会制民主主義を重視して漸進的改革を目指す穏健な社会主義を指す。

問6 22 正解は②。

- ア 正しい。フッサールの創始した現象学の立場では、人は意識の外部の世界を直接知ることができない。そこで意識の外部世界を当然の前提とするのではなく、そうした自然的態度を「エポケー(判断停止)」し、あくまで意識の内部世界における現象世界を詳細に記述することに徹するべきだとする。この立場を表すスローガンが「事象そのものへ」である。
- イ 誤り。内的な自己が他者との関係を通じて外化していくことで自由が獲得できるとするのは、ヘーゲルの『精神現象学』の立場である。

問7 23 正解は①。

- a—ア aを含むUの発言を受けて、それに同意しつつ発言しているRが、いじめを止めなかった経験について、「私だって、絶対に止められたはず」と述べている。イは、Uが吉野の本を読む以前の「後悔」についての見方であろう。
- b—ウ 空欄には「誤りを犯すこともある」および「いじめを止めることもできる」の根拠となる言葉が入るから、「自分で自分を決定することができる」が適切である。エについては、直後のRが「自分のためかどうかとは関係なく」と述べていることとも矛盾する。

問8 24 正解は③。

- ③ 「良心の声はどこから聞こえてくるのか」という問いに対し、56 ページの文章では、ハイデガーの立場として、「私の内から」聞こえてくるとされている。また問8の会話文では、先生 T が「誰かと共に、知る」の「誰か」には自分が含まれると述べている。
- ① 「誰か」に周りの人が含まれるのは当然としても、それが「最も重要」だとはされていない。むしろ前述の通り、「誰か」には「本人」「自分」が含まれることが強調されている。
- ② 「知る」働きが道徳や倫理の唯一の根拠だという記述はどこにも見られない。
- ④ 56 ページの文章では、アーレントを紹介する中で、良心を自ら麻痺させてしまう事例が示されている。

## 第4問 青年期・現代社会分野

問1 25 正解は④。

- ④ 20 世紀のユダヤ人哲学者ハンス・ヨナスは、世代間倫理を哲学的に基礎づけた。
- ① 前半と後半が逆。リオタールは、個別の「小さな物語」を超えた「大きな物語」によってあらゆる事象を説明しようとしてきたヘーゲルやマルクスらに見られる理論はポストモダン状況においては、もはや成立しないと論じた。
- ② フーコーの「知の考古学」とは、「普遍的理性に基づく絶対的な真理を探求」するものではなく、そのようにみなされてきた真理を相対化し、それらが生み出された歴史的経緯を解明しようとするものである。
- ③ レヴィ＝ストロースは、未開から文明へという歴史観を批判し、未開社会を生きる人々の「野生の思考」が独自の意義を持つことを強調した。

問2 26 正解は①。

- ア ユングは、心のエネルギー(＝リビドー)が自己の内面に向かいがちな内向型と、外部に向かいがちな外向型とにパーソナリティを分類した。クレッチマーは、パーソナリティの中心に気質があるとして、それを体型(細身型、肥満型、闘志型)と関連づけた。
- イ シュプラランガーは、パーソナリティを各人の価値観と結びつけた。オルポートは成熟したパーソナリティの特徴などを整理したことで知られる心理学者。

問3 27 正解は③。

- ア 誤り。リップマンは著書『世論』の中で、マスメディアの提供する情報が過度に一般化される現象を「ステレオタイプ」の用語で説明した。マスメディアによる情報は「常に人々から疑いの目を向けられ」るのではなく、それが一般化されて事実と反する思い込みにつながるとされる。
- イ 正しい。マスメディアによる情報は、事実のすべてを余すところなく伝えるものではあり得ず、必然的に一定の取舍選択や単純化などが起こってしまう。
- ウ 正しい。人は世界のすべてを体験することはできず、マスメディアの報道によってつくられた世界のうちを生活している。こうした世界のことをリップマンは「疑似環境」と呼んだ。

問4 28 正解は⑥。

- a 「自我がエス(イド)と超自我」が入る。フロイトによれば、心は自我、エス、超自我の三部分に分けられ、意識的・自覚的な領域である自我が他の二部分を調整しようとしているとされる。
- b 「勉強不足が原因だと分析し、計画的に勉強しようとする」が入る。「問題焦点型対処」とはストレスの原因に目を向けてその原因そのものを変えるものなことなので、成績の悪さを勉強不足によると分析して計画的に勉強することは、これに当たる。これに対してただ気持ちを切り替えようとしたり、運が悪かったと思いつまもうとしたりすることは、問題の原因となる状況を変えようとせずに情動を軽減しようとしているのだから、「情動焦点型対処」に当たる。

問5 29 正解は②。

- ② ベンチで寝ることができないようにすることは、むしろ「バリア」を設けることである。
- ① 目の不自由な人などにとって、信号機の情報が聴覚でも捉えられるようになれば、障壁が軽減される。
- ③ 自動販売機の投入口が低い位置に置かれるならば、車椅子の人にとっての障壁が軽減される。
- ④ 手を使わずに済む自動ドアは、手の不自由な人にとっての障壁を軽減するものである。

問6 30 正解は④。

- a 「恣意的な取捨選択に委ねず、忘れることなく書かれるべきだ」が入る。第4問冒頭会話文中のPによる第八の発言を言い換えたものである。「正しい書き方は決められず、その書き方は全て自由にすべきだ」は、第4問冒頭会話文中のPによる第五の発言で否定されている立場である。
- b 「人間だけでなく自然そのものにも価値があることを認める」が入る。自然の生存権とは、権利主体を人間に限定せず、動物などの自然にも認めるべきだとの考え方であり、その考え方の背後には、自然そのものに価値があるという見方がある。「現代の人間にとって有用な自然を優先的に保護する」というのは人間中心主義的な発想に基づく自然保護論にすぎず、自然の生存権の主張とは異なる。

問7 31 正解は④。

- a 「高い」が入る。表によれば、A郡の大学生が4.8と、B群の大学生4.0よりも高い。
- b 「アとイ」が入る。5分後のテスト結果を示しているのは図のアとイで、それによれば5分後ではA郡のほうがB群よりも好成績である。
- c 「ウとエ」が入る。1週間後のテスト結果を示しているのが図のウとエで、それによれば1週間後ではB郡のほうがA群よりも好成績である。
- d 「一致しない」が入る。5分後で好成績を残したのがA郡であるのに対し、1週間後で好成績を残したのはB郡であった。

問8 (1) 32 正解は②。

- ② 「物質的な生産関係」は土台(下部構造)である。上部構造は土台によって支えられる哲学や法律などの精神的産物である。
- ① マルクスはヘーゲルの弁証法を継承・発展させつつ、精神的なものが根源的であるとするヘーゲルの観念論を転倒させた。
- ③ マルクスは階級闘争が歴史の原動力であると主張した。
- ④ 空想的社会主義とは違って、マルクスは、労働者階級の革命的実践によって資本主義が打倒されると論じた。

(2) 33 正解は⑤。

a—ウ 第4問冒頭の会話文におけるPの第二の発言を参照。

b—ア 「歴史は、様々に書くことができる」というのは、第4問冒頭の会話文におけるQの第二の発言が元になっている。

c—イ 「どの出来事にも意味がある……過去のどの出来事も忘れられてはならない」というのは、ベンヤミンの資料文2-3行目の「かつて起こったことは何一つ歴史にとって失われてはならない」という記述に対応する。また「現時点ではその全てを書くことはできない」というのは、資料文3-4行目「人類が自らの過去を完全な姿で手中に収めることができるのは、人類が解放されたときである」という記述に対応する。